

# 「ひきこもり」という人はいない



© 内池秀人

## NPO法人フォロ事務局長 山下耕平さん

<プロフィール>

フリースクール「東京シューレ」スタッフ、『不登校新聞』編集長を経て、現在はNPO法人フォロ事務局長、全国不登校新聞社理事、関西学院大学非常勤講師。

著書：「迷子の時代を生き抜くために」(2009)「名前のない生きづらさ」野田彩花・山下耕平著(2017 クレオ大阪西所蔵)

あたりまえのことですが、「ひきこもり」という人はいません。

人がひきこもることはあっても、それはその人の状態のひとつで、「ひきこもり」という人たちがいるわけではない、ということです。「ひきこもり」という名前は、精神科医(斎藤環)がつけたもので

すが、精神科医たちも、ひきこもりは精神疾患ではなく、あくまで状態像だと言っています。つまり、特別な人たちがなるということではなく、誰だって、そういう状態になることはありうる、ということです。

あたりまえのことなのですが、どうも、そこが働きがいされていることが多くあるように思います。何かおかしな人たちがいて、働こうともしないし、親に依存して、ネットとかゲームとかに依存して、ややもすると犯罪を起こす——そんなイメージが世間には垂れ流されているように感じます。そして、当事者を苦しめているのは、あるいは身動きをとりにくくさせているのは、そういう世間のまなざしであるとも言えます。

## 他者の悪魔化

なぜ、ひきこもりが白眼視されるのかと言えば、いまの社会では、実は多くの人が苦しさを感じていて、それでも自分がかんばっているのに、かんばれないヤツは許せない、という感情を持つからかもしれません。それは、ひきこもりに対してだけではなく、たとえば生活保護受給者に向けられる場合もあります。でも、ほんとうは怒りを向けるべきは、自分たちを苦しめている社会のあり方のほうではないでしょうか。

ジョック・ヤングという社会学者は、それを「他者の悪魔化」と言いました。ある一部の人を「悪魔」とみなすことで、自分たちは正しいんだと思いたがるものの、実際には、自分たちの置かれている状況を見ないことになってしまう。しかし、それでは、自分たちを苦しめている社会状況は、ますます苦しくなるばかりです。

## ひきこもり〈から〉考える

他者を悪魔化するのではなく、考え合っていくには、どうしたらよいでしょうか。私は、ひきこもり〈を〉考えるのではなく、ひきこもり〈から〉考えていくことが大事だと思っています。ひきこもっている人をどう動かそうと考えるのではなく、人がひきこもらざるを得なくさせている状況は何なのか、あるいは、どういう社会構造のなかで生じていることなのか。それを考えていくことは、結果として、本人が身動きをとりやすくなることにもつながるかもしれません。「支援」というのであれば、そういう視点を置いては考えられないと私は思います。